郷土史への扉

シリーズ大隅国を知る ❸

大隅国府はどこか ❶

これまで、大隅国建国の背景や統治の組織について述べましたが、今回は政治の中心的役割を果たした「国府」はどこにあったかについて紹介します。

一　国府と国衙

国府の所在について述べる前に、まず、国府と国衙の違いについて紹介したいと思います。

国府は、国衙や重要な施設を集めた都市のことです。

国衙は、各律令国において国司（国衙に勤務する役人）が地方の政治を行う役所が置かれていた区画のことでさらに、その中枢で国司が儀式や政治を行う施設のことを国庁または政庁と呼びました。

では、国衙の中心となる、国庁はどのような施設があったのでしょうか。国によって若干の違いはありますが、中庭を囲んで正殿、東脇殿、西脇殿を冂字形に配置してあり、南に正門を持つ構造となっていました。

二　大隅国府はどこか

では、大隅国府はどこに置かれたのでしょうか。『続日本紀』には四つの郡名のみで、国府の場所までは書かれていません。大隅国府の所在の最初の記述は、平安時代中期の承平五（九三五）年頃に編さんされた『倭名類聚抄』の中に、「久波々良国府」と登場し、『拾芥抄』には「曽於郡」と登場します。大隅国府が桑原郡と曽於郡の境界付近にあったと考えられます。

桑原郡や曽於郡は、現在の姶良地域で、大隅国全体の領域から見ますと、かなり偏った場所に国府が置かれました。

ここで、ひとつの疑問が生じます。国を治めるには、その領域の中心に拠点を置くことが重要で、大隅国の場合は、現在の鹿屋や志布志湾沿いに国府を置いた方が、地理的に見ても理に適っているように思います。

三　大隅国の事情

では、何故、大隅国府を姶良地域に置いたのでしょうか。

それは、建国の要因にもなったように、錦江湾奥一帯の人々が最後まで大和朝廷に従わず、抵抗を続けてきたことが挙げられます。

一方、大隅半島（大隅隼人）や薩摩半島（阿多隼人）の人々は、かなり以前から服従していました。それは、日本書紀の天武天皇十一（六八二）年七月の記事に「隼人の人々多く※1来朝し、貢物を献上す。朝廷において阿多隼人と大隅隼人が相撲を取り、大隅隼人が勝つ」とあることからでも分かります。また、考古学的見地からも、南九州において、大隅・薩摩半島には※2「古墳」がありますが、湾奥の国分地方には古墳は見られず、大和の影響を受けていなかったことがわかります。

このように、朝廷は不穏な地域を抑えるために、あえてその地に国府を置き大隅国の安定化を図りました。

次回、大隅国府の中心的な施設であった国衙の場所について紹介します。

（文責＝鈴）

※1　属国の使者などが朝廷へ来て貢物を献上すること

※2　円墳・方墳・前方後円墳など、墳丘をもつ古い墓（畿内型）

大隅国建国1300年記念

大隅国は和銅６(713)年に建国され、その国府は霧島市国分にあったといわれています。今年は建国1300年を迎えます。そのことを記念して、さまざまなイベントを実施します。

■連続講演会 第3回講演会

- 日時＝３月17日（日）午後１時30分～３時
- 場所＝国分シビックセンター２階多目的ホール
- 講師＝坂元祐己（霧島市教育委員会職員）
- 内容＝大隅国府と大隅国分寺跡の調査
- 申込方法＝電話で。　● 申込期間＝３月15日(金)

◎問・申＝文化振興課　☎(42)1119